

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記を一部変えています。)

高校のある時期から私は「考える」ということの謎に捕われるようになった。学力優秀だったからでも、とくべつに哲学少年だったからでもない。むしろ逆である。ただ自分の考え方がクラスメイトに比べてかなり①マイナーであったこと、そして勉強があまり出来なかったこと、このふたつがおそらく動機になっていた。

思春期の少年にとってマイナーであることはかなり息苦しい気分させられるものだが(ささやかな自負の気分もあればこそなおさら)、このマイノリティの問題は「思考」について考えるうえでかなり重要な鍵を握っている。そこでこの問題はあとでゆっくり考えるとして、先に「②勉強が出来ない」というテーマから見えていきたい。早とちりしないでいただきたいのだが、「勉強が出来ない」のは「考える」力が欠けていたからだと言いたいのではない。むしろ逆に、③「勉強が出来ない」と、考えることの不思議に出遭えるチャンスがあると云いたいのである。

④先天的な能力を認めるのにやぶさかではないが(能力にもいろいろあるけれども)、勉強が出来るといふことにはすくなくともふたつのポイントがあると云っていいだろう。まず⑤勉強する動機がはつきりしていること。大学受験以前からすでに学問の面白さに魅せられるといった幸福なケースもないではないが(有数の進学校であった私の高校にはあまり見当たらなかった)、ふつうは「出来るとかっこいい」、「ひとより⑥タクエツしていたい」、「いい大学に入りたい」、「将来いいポストにつきたい」といった非難すべきでもないがけっして賞讃にも値しない心理が動機の大半を占めているだろう。この動機づけがしっかりしていれば勉強の集中力と効率も格段に進ずる。これがひとつめのポイント。

ふたつめは「定石」習得能力である。現在でも「理系」、「文系」などとあたかも必然的な能力のように言われているけれども、大学受験レヴェルの数学で問われているのは解法の「定石」を整理しすばやく適用する力であり(出題者は「思考力」を問いたいのだろうけれども)、英語の構文という「定石」を暗記して解釈に適用する能力と大差はない。

推論能力に秀でたひとであるのに、「自分は数学が苦手だったから初めから私立文系を目指した」などというひとに時たま出くわす。こういうひとはたまたま数式の⑦羅列にリアリティを感じられなかっただけで、ほんらい「理系」の標準レヴェルよりずっと論理的な力に⑧長けていたにちがいないのだ。

⑨勉強が出来るといふことは「定石」をすばやく理解し即座に応用する反射神経があるということ、そしてその反射能力を磨いたということである(というだけだ)。これもひとつの頭のよさにはちがいないが、事務処理能力以上の頭のよさではない(事務処理能力が世間の能力の大きな部分を占めるのも事実だが)。だから「数学は暗記科目である」という⑩ギャクセツ的な言い方も半分は正しい。ただし「⑪『痴人の愛』の作者を記せ」といった設問と同一視はできない。この「定石」適用能力がふたつめのポイントである。

⑫勉強が出来ないのは、モチベーションが希薄であること、そして、「定石」適用能力に欠けているといったことに等しい。これはいさぎよく認めておこう。以下、定石を理解し適用する能力を簡略に「定石能力」と呼ぶことにする。この定石能力があればいい成績が取れるのだから、勉強が出来る生徒はこの定石適用プロセスをとくに疑おうとはしない。疑うだけ無駄な労力だ。

⑬勉強が出来ない生徒は、まず定石がよく理解できない。なぜそのように考えなければならぬかがさっぱり分からない。仕方なくただ定石を暗記してつぎの適用段階に行っても、定石が身に付いていないからちつとも解けない。「なんてオレは頭が悪いんだろう」と、ここで頭を抱えたらお仕舞いである。

勉強が出来る生徒もこのプロセスの⑭キビをきっちり理解してここまで進んできたわけではない。飲み込みがちよつと早かっただけで、原理的にしっかり把握している優等生は稀なはずだ。優等生の末路を見ればそのことがよく分かる。

だから勉強が出来ないということは、なぜそのような定石が妥当なのか、なぜこのようなケースにこの定石が適用できるのか、といった思考のプロセスを教室や参考書の簡略な説明では納得できなかったということ、すなわち批判能力の賜物なのである。納得しなかったのは理解力が未熟であったこともあるだろう。しかしそんな⑮柔な説明では分かったとは言えないという気持ちもそこに作用していたはずだ。

このいまだ潜在的な段階にある批判能力を自覚して問題としてとらえること、これこそ劣等生だけが手にしたチャンスである。劣等生は「勉強が出来ない」という⑯ダイショウを支払ってこのチャンスをもにした。優等生は「勉強が出来る」という成果のためにこの機会を目前に失った。このときすでに劣等生は優等生を凌駕するスタート・ラインに⑰トウタツしていたのである。

⑱いささか注香具師の口上めいてきたが、私自身このようにして「考える」ことを考えることに目覚めた。これはたんに個人的なエピソードではないと確信している。『考える』とはどういうことか? 井崎正敏

注 香具師の口上・・・縁日や祭礼などに露店を出して商売をしたり、見世物などの興業をする人が言う、大声で客の注意を引いて物を買わせたりするための決まり文句。

問一 傍線部⑥・⑦・⑧・⑩・⑭・⑮・⑯・⑰の片仮名を漢字に、漢字を平仮名に直しなさい。

問二 傍線部①「マイナー」の反対語を書きなさい。

問三 傍線部②「勉強が出来ない」とあるが、筆者の考えている勉強が出来ないということにある二つのポイントを抜き出して、十五字以上二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 傍線部③「勉強が出来ない」と、考えることの不思議に出遭えるチャンスがある」とあるが、なぜ「勉強が出来ない」と、考えることの不思議に出遭えるチャンスがあるのか。その理由を**本文全体に述べられている筆者の考えの流れに従って**八十字以上百字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問五 傍線部④「先天的な能力を認めるのにやぶさかではないが」とはどういう意味か。説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間には持って生まれた能力というものがあるのだということを確認するのはたいへん不本意だけれども

イ 人間には持って生まれた能力というものがあるのだということを確認するのにためらいはないけれども

ウ 人間には持って生まれた能力というものがあるのだということをむしろ認めたくはないけれども

エ 人間には持って生まれた能力というものがあるのだということを確認するのに少しためらいがあるけれども

オ 人間には持って生まれた能力というものがあるのだということを確認するのは多に賛成だけれども

問六 傍線部⑤「勉強する動機がはっきりしている」と、なぜ勉強が出来るのか。文中の語を使って二十字以内で答えなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 空欄部⑨・⑫・⑬に入る最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ そして ウ だから エ また オ つまり

問八 傍線部⑪『痴人の愛』の作者を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夏目漱石 イ 芥川龍之介 ウ 川端康成 エ 谷崎潤一郎 オ 村上春樹

問九 傍線部⑩「いささか香具師の口上めいてきたが、」とは、どういうことを言おうとしているのか。説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 劣等生だけがチャンスを手にし、優等生をしのいで上に出るスタートラインに立っているのだという言い方は、内容がなくて少し誠実さに欠けて聞こえるかもしれないが、ということ。

イ 劣等生だけがチャンスを手にし、優等生をしのいで上に出るスタートラインに立っているのだという言い方は、少し結論を急ぎすぎて性急に聞こえるかもしれないが、ということ。

ウ 劣等生だけがチャンスを手にし、優等生をしのいで上に出るスタートラインに立っているのだという言い方は、少し調子が良すぎて大きさに聞こえるかもしれないが、ということ。

エ 劣等生だけがチャンスを手にし、優等生をしのいで上に出るスタートラインに立っているのだという言い方は、あまりにも自説を押し付けようとしすぎかもしれないが、ということ。

オ 劣等生だけがチャンスを手にし、優等生をしのいで上に出るスタートラインに立っているのだという言い方は、自分の都合だけを考えていて見苦しいかもしれないが、ということ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

《中学二年生の新学期、津村小春のクラスに塚本葵が転校してきた。その日の昼休み、理緒は、食前に祈りを唱える葵のことを小ばかにして笑っていた。》

翌日の昼休み、葵は昨日とは離れた位置に固まる理緒たちの背中を数秒見つめ、そのあと小春と夕花の方へ顔を動かした。目線が重なる直前、小春は慌てて弁当の具について、どうでもいい内容を夕花に話しかけた。①まるで視野が三十度しかない動物になったかのように、かたくなに手元の卵焼きに目線を注いでしゃべり続ける。しばらくしてそっと顔を持ち上げると、葵は自分の席に着いたまま、唇をきゅつと結んで目の前の弁当を見つめ、胸の上で指を上下左右に素早く動かし、早口でなにか唱えてから箸をとった。確かに十字架、だった、と思う。早すぎてよくわからないけれど、たぶん。

気がつけば、クラスがしんと静まり返って彼女に注目していた。葵が銀紙に包まれたおにぎりをむく、カサカサと乾いた音だけが耳をかすめる。私なら、と小春は思う。私なら、この教室では食べたくない。それとも信仰などという小春にとってまったく未知のものは、それほど強い精神力を一人の少女へ与えるものなのだろうか。葵はあせるでもなく悲しむでもなく、落ち着いたペースで弁当を食べ終え、空の弁当箱を布袋へしまうと机から文庫本を取り出した。凜と背筋を伸ばしたその姿は、やけに大人っぽく見えた。

チーム分けを見て、心臓が一度、強く弾んだ。

ボール練習の終わりにいつも行われる、コートの中を走った三対三のミニゲーム。その日、小春と同じチームになったのは三年の先輩が一人と、今日初めて練習に参加した葵だった。クラスメイトと一緒にした方がリラックス出来るだろう、とコーチが気を回したのかもしれない。②クラスでの挙動を知らない三年生は気さくに葵へ話しかけ、葵もそれに言葉少なに答えている。

ゲーム開始のホイッスルが鳴った。スローインから、両チームの三年生同士ががつりとぶつかり合う。抜けない、と判断した同じチームの三年生がパスの相手を探しているものの、小春は敵チームとなった理緒にひたりと張り付かれていて、なかなか振り払えない。その時、ふいにゴール下へ葵が躍り出た。うまく自分をマークしていた三年生を引きはがしたらしい。強めのパスをしつかりと受け取り、そのまま水が流れるようなレイアップシュートを決める。試合を見守っていた他の部員からおお、とどよめきが上がった。

葵はびつくりするほどバスケがうまかった。恐らく六人いる二年女子の中でも、理緒の次ぐらいにはうまい。三年生にもひるまずにプレッシャーをかけてボールを奪い、味方へパスを通す。試合の流れをととてもよく見ている。

ゲームの終盤、敵二人に囲まれながらつむらさんつ、と鋭い声でコートの反対側の小春を呼び、ワンバウンドでボールを渡した。無口な葵が自分の名前を覚えていたことに驚きながら小春はそれをキャッチし、とっさにゴール方向へ顔を上げた。気がつけば、自分はいちばんシュートを入れやすいゴールリングから四十五度の角度に立っていた。しかもディフェンスは葵に引きつけられていて、ブロックに入る選手はいない。迷わず、飛ぶ。リング後部のボードに描かれた、四角形の③スミを夢中で④ネラう。

小春が放ったボールはすぱっと網を抜ける気持ちの良い音と共にリングをくぐり抜けた。全身の血が⑤ワキ立つような⑥ソウカイなシュートだった。それが自分一人の力によるものではないことを、誰よりも小春がわかっていた。

ゲームが終わってからも、自分を呼ぶ葵の声が頭から離れなかった。どく、どく、と足の裏が興奮で脈打っている。汗でTシャツの色が変わった、小柄な背中に目を引かれる。すごいね、と言いたい。同じことを理緒や夕花がしたなら迷わず言う。クラスのムードが彼女を敬遠する流れにあるからといって、自分の心から湧いて出たものをのみ込んでしまうのは悔しい。ぼかぼかと肌を温める余韻に後押しされ、小さな崖を飛び越える気分で話しかけた。

「⑦ねえ、小春でいいよ。試合中、その、名字のさん付けだと、長いからさ」

喉をそらしてペットボトルの水を飲んでいた葵は、ぎょつとした様子で振り返った。ボトルを下ろし、言葉の意味をかみ砕くよう、まばたきをしながら小春を見返す。小麦色の頬から汗の玉が一すじ垂れて、細い顎の先からこぼれた。

「⑧わかった、試合中は名前で呼ぶ」

ぎゅつと心臓をつかまれた気がした。この子はかしこいな、と思う。そして、私は少しうかつだ。でも名前呼びくらいなら、同じ部活だからとかそんな理由だろうと、クラスのみんなも許してくれる気がする。それにここで引いてしまったら葵に臆病者だと思われるうだ。実際、おびえる気持ちはあるのだけど。お祈りとかわからないし、そういうのにどっぷり浸かって生きている人なんて想像できないし、一緒にされたらこわいし。

でも、人を好きになったりきらいになったりするのには、自分でしたい。理緒が作ったクラスの雰囲気には流されるのはイヤだ。小春は細く息を吸った。

「⑨試合以外でも、普通に名前と呼んで。同じ部活だから」

こわさの分だけ、強くて硬い声が出た。葵はますます目を大きくした。よく光る、黒目の⑩リンカクが強い眼で小春を見つめ、やが

て「こはる」と音を確かめるように唇を動かす。

「うん。行こう、葵。最後はいつもランニングなんだ。四キロ走るから、準備運動ちゃんとして」  
「わかった」

野外用のシューズに履きかえて体育館を出る。茜空の下ではもう他の部員たちが雑談しながら準備運動を始めていた。支度が出来た部員から順に、学校の真横を通る川べりのジョギングコースへ走り出す。二つ先の橋まで片道二キロ、折り返して四キロの計算だ。アキレス腱を伸ばしていた夕花が、小春と葵が並ぶ姿に気づいて「あれっ」と素っ頓狂な声を上げた。小春は屈伸をしながら口を開く。

⑩ さつきはあれほど威勢よく言えたのに、まるで空気の塊が喉につつかえたみたいに、夕花の前では、うまく葵のことを名前と呼べなかった。

「塚本さん、ランニング初めてだから、コース教えに一緒に走ってくる」

「ふーん」

やけに平べったいふんだった。勝手に決めて、と怒ったのかも知れない。いつもは一緒に出発することが多いのに、先に準備運動を終えた夕花は「先に行くね」と一声残し、一人でさっさと校門へ走り出した。

名字呼びをしたことに気づいただろうか。さりげなく隣をのぞくと、葵は特に表情を変えず、上半身を反らして背筋を伸ばしていた。お互いの体が充分にほぐれるのを待って、走り出す。

持久走はそれほど得意ではないらしい。半歩後ろの葵が時々苦しそうに喉を鳴らすので、小春はいつも少し遅めのペースで走った。

普段一緒に走る夕花は試合ではあまり目立たないものの、実はとても肺が強く、一キロほど走ると「体が温まった」と言っただんぐんスピードを上げ始める。そんな彼女についていこうと小春も足を速めるが、大抵は二キロの折り返し地点に届く手前で振り切られた。そんな風にあせり気味のランニングを長く続けてきたせいか、自分よりもペースの遅い葵に合わせて走るのは新鮮だった。普段は気にも止めない風景が、やけに染みいるように目に入る。散歩をする人の背中、川べりに茂った植物の群生、そばのマンシヨンのペランダで洗濯物を取り込む主婦の腕。一つ一つへと意識が向く分、走る距離がいつもよりも長く感じる。空を映した川が茜から群青へと色合いを変え、やがて真っ暗に沈んだ水面に涼しく光る月が浮かんだ。

「戻ったらコーチに報告して、今日はもう解散だから。あと一息」

残り五百メートルほどの地点で呼びかけると、しゃべるのも辛いのか、葵は無言でうんうんと頭を上下させた。その間にも次々と他の部員に追い抜かれる。すでにあらかたの生徒が下校し、しんと静まり返った校門にたどりついたのは小春たちが最後だった。あまりに遅い、としびれを切らせたのか、夕花の姿も見当たらない。鉄製の門扉をスライドさせるレーンを見立てて飛び越える。疲れ切った葵は両手をひざに当て、ひゅうひゅうと喉を鳴らしながらせき込んだ。

「おつかれ」

苦しげな背中に片手を弾ませてねぎらう。葵は唾を飲み、ふたたび無言でうなずいた。しばらくして、その姿勢のまま、まだ呼吸が整わないかすれ声で切り出した。

「教室、で、話しかけないから。そっちも、話しかけないで」

もしかしたら走っている最中に、ずっとこれを言おうと考えていたのかも知れない。そんな性急な切り出し方だった。うずいていた不安を的確に刺し貫かれ、小春は口をつぐんだ。ようやくせきを止め、大きく胸をふくらませた葵は、汗だくの顔を持ち上げて強く光る目で小春を見た。

「でも、部活で……今みたいに、あんまり人がいないときとか、話してくれるのは、うれしい。私も、小春、が、変に誤解されたり、とか、変に心配しないで、……いいし」

小春の名前を、本当に呼びづらそうに呼んだ。変に、変に、とまるで何かを断定するのを嫌がるような調子で言う。葵は何を指して「誤解」と言ったのだろう。小春まで宗教にはまっていると思われる、という意味だろうか。口火を切った瞬間は凜と輝くようだった葵の目は、少しずつ、少しずつ、まるで返事を恐れるように目線の先を小春の目から口元へとずらしていった。

目の前の、会って間もない同学年の少女が、たくさんの躊躇やおびえを押し切り、傷つくことを半ば覚悟しながら心を乱してしゃべっている。そのことに小春は呆然とした。けれど、だからって、クラスメイトの前で堂々と葵と仲良くする勇氣は持てない。昼休みにクラスを凍てつかせた沈黙は、今もしつかりと耳に残っている。

⑪ わかった、そうする、と辛うじてうなずく。すると、葵はあからさまにほっとした様子で口元を和ませた。

問一 傍線部③・④・⑤・⑥・⑩の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「まるで視野が三十度しかない動物になったかのように」とあるが、ここでは誰のどういう様子を表しているか。具体的に三十文字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問三 傍線部②「クラスでの挙動」とあるが、具体的に誰のどのような行動か。文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問四 傍線部⑦「ねえ、小春でいいよ。試合中、その、名字のさん付けだと、長いからさ」とあるが、小春はなぜこのように言ったのか。その理由を文中の言葉を使って九十字以上百十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問五 傍線部⑧『わかった、試合中は名前と呼ぶ』と葵は言ったのに、傍線部⑨『試合以外でも、普通に名前と呼んで。同じ部活だから』と小春が言ったのはなぜか。その理由を、解答欄に合うように文中から五十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問六 傍線部⑪「さつきはあれほど威勢よく言えたのに」とあるが、「威勢よく言えた」言葉を、文中から一文で抜き出しなさい。

問七 傍線部⑫「わかった、そうする、と辛うじてうなづく。すると、葵はあからさまにほっとした様子で口元を和ませた。」について、このときの小春と葵の気持ちとして最も適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 教室で話しかけられないでほしいと、走っている最中にずっと言おうと考えていたことが言え、「小春」と名前で呼ぶこともできて、これでやっと親友ができたと思ふ気持ち。

イ 教室で話しかけられないことは、葵を孤立させ、傷つけることになるが、これは葵が自分のためを思つての気遣いだとわかっていから仕方なく納得する気持ち。

ウ 教室で話しかけられないでほしいと言われたとき、葵と一緒にされたらこわいという思いを的確に指摘され腹が立ったが、葵のためがまんしようと思ふ気持ち。

エ 教室で話しかけられないと小春に言われた時は傷ついたが、小春のために自分も話しかけられないと約束し、小春を安心させてやろうと思ふ気持ち。

オ 教室でお互い話しかけないでいようと葵に言われ、仲良くしたいという思いを踏みにじられた気がしたが、自分まで宗教にはまっていると思われたら困るから、かえってよかったと思ふ気持ち。

カ 教室でお互い話しかけなくても、部活で話せることはうれいことだし、それだと小春が誤解されたり自分が心配したりしなくてすむので、了解してくれてよかったと思ふ気持ち。

問八 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア バスケットボール部の練習で三対三のミニゲームの時、小春はバスケットがうまい葵と同じチームになったのを見て、小躍りして喜んだ。

イ 葵のバスケのうまさ感動した小春は、ぜひ葵と友達になりたいと願ひ、クラスメイトの反応は無視して自分から声をかけた。

ウ 小春は、葵がクラスメイトから挙動不審で避けられても、凛と背筋を伸ばして動じないように見えたが、実は心の内におびえや不安を抱えていることを知った。

エ 葵は、クラスの中では自分に声をかけず知らないふりをする小春を臆病者だと思いつつ、クラブの中では頼りになる友人だと感じていた。

オ 小春は、クラスメイトの前で葵に声をかけないということが、葵を傷つけていると分かりながら、堂々と仲良くする勇氣はなかった。

カ 葵は、自分が傷つくことを覚悟しながら、小春のために自分に話しかけないように言うので、小春はその思いやりにほっと安心した。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記を一部変えています。)

(その男が子供の時からお仕え申し上げた君が、御出家なさってしまった。)

(参上した。)

むかし、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、御髪下ろしたまうてけり。①正月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、②つねにはえまうです。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむあり(③)。むかし仕うまつりし人、俗なる、

(正月だから特別にとお考えになって、御酒を)

禪師なる、④あまた参り集りて、正月なればことだつとて、大神酒⑤たまひけり。雪ほすがごとふりて、⑥ひねもすにやまず。みな人

酔ひて、雪にふりこめられたり、といふを題にて、歌ありけり。

A 思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積るぞわが心なる

(親王は御自分のお召しものを脱いでお与えなされた。)

とよめりければ、親王、いといたうあはれがりたまうて、⑧御衣ぬぎてたまへりけり。

### 『伊勢物語』第八十五段

問一 傍線部①「正月」とは陰暦での一月の異名である。月の異名のうちで間違っているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 卯月(五月)    イ 如月(二月)    ウ 葉月(八月)    エ 神無月(十一月)    オ 長月(九月)

問二 傍線部②「つねにはえまうです」の主語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 男    イ 君(親王)    ウ 親王に仕えている人

問三 空欄部③に入る、過去を現す助動詞「けり」の活用形として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けり    イ ける    ウ けれ

問四 傍線部④「あまた」⑥「ひねもすに」の意味を書きなさい。

問五 傍線部⑤「たまひけり。」を、主語と動作の相手を補って、口語訳しなさい。

問六 傍線部⑦「酔ひて」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問七 Aの歌の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親王が、昔の臣下たちのことをいくら思っても、臣下の身を二つに分けることはできないので、小やみなく雪が降って帰れないくらいに積もることが、臣下たちを帰らせたくない自分の気持ちに合うのだと、臣下たちへの思いを詠んでいる。

イ 親王が、修行の身である自分はいくら臣下たちと一緒に屋敷に戻りたくても、ここを離れることはできないので、小やみなく雪が降ってここから出られないくらいに積もることが、自分の気持ちに合うのだと、臣下たちへの思いを詠んでいる。

ウ 男が、あなたのことを大切に思っている、わが身を二つに分けることはできないので、小やみなく雪が降って帰れなくらいに積もることが、あなたの傍を離れたくない私の気持ちにぴったりなのですと、親王への思いを詠んでいる。

エ 男が、あなたのことを大切に思っている、今すぐに自分の身边を整理して、ずっと親王の傍にいたいということはできないので、どうしてもなく悲しくて、小やみなく降る雪と同じように涙が流れて止まらないと、親王への思いを詠んでいる。

オ 僧侶である人が、あなたのことを大切に思っている、仏道に入った自分は寺に戻らねばならないので、雪が降って帰れなくらいに積もることが、あなたの傍を離れたくない私の気持ちにぴったりなのですと、親王への思いを詠んでいる。

問八 傍線部⑧「御衣ぬぎてたまへりけり。」とあるが、親王がお召しものを脱いで褒美としてお与えになった理由を十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)